馬と自然が紡ぐ
「評価なき空間」による
社会的マルトリートメント
予防モデルの構造分析

音声解説

関連資料

コメント＆
質問フォーム

一般社団法人三陸駒舎　黍原（きびはら） 豊

① 背景｜社会的マルトリートメント

評価社会のモデル

能力基準

▼

比較

▼

序列

▼

対象化

社会的マルトリとは

ある社会で「あたりまえ」とされている
価値観や習慣によって、
弱い立場の人の
ウェルビーイング
が損なわれる状況。

構造としての特徴

- 能力基準による序列化
- 「できる／できない」の二分化
- 外部評価の優位
  （成績・診断・成果指標）
- 子どもの対象化
  （管理・改善の対象）
- 成果主義・効率主義の常態化

本研究の立場

問題は「個人の失敗」ではなく、
評価が常に前景化する**空間条件**にある。

② 研究の目的・リサーチクエスチョン

問いの転換

従来の問い

子どもにどう支援するか

本研究の問い

評価が前景化しない空間は
どのように成立するか

研究の目的

「評価なき空間」による
社会的マルトリ予防モデルの
〈生成構造〉〈維持構造〉
を明らかにする。

リサーチクエスチョン

三陸駒舎において「評価なき空間」は、
どのような相互作用構造によって
生成・維持され、それはいかに
予防モデルとして整理できるか。

③ 研究対象｜三陸駒舎の実践構造

三陸駒舎の実践は「技法」ではない

本研究の対象は、
個別的な支援技法の
集合ではない。
非人間・大人・子ども
が相互に規定しあう
空間構造である。

非人間基盤層

前提は「ままならなさ」

- 馬（予測不能・拒否・身体反応）
- 自然環境（地形・天候・季節変化）
- 物理的不全(壊れる道具･凍結･重い水)

▼

運用原理層

成果よりも「空間の質」

- 教えすぎない
- 止めすぎない
- 比較しない
- 禁止を増やさない

▼

子ども活動層

空間に生じる「空白」
が役割を生む

- 役割の自発的取得
- 清掃・給餌などの身体的ルーチン
- 協働・仲裁・誘い
- 試行錯誤と再挑戦

④ 方法｜空間単位分析の設計

分析の流れ

記録

▼

抽出

▼

分類

▼

構造化

研究デザイン

本研究は、三陸駒舎の日常実践を対象とする事例研究

分析単位は「個人」ではなく、空間の生成・維持構造

分析対象データ

① 非人間＋運用原理分析

・スタッフ ミーティング記録

・スタッフ インタビュー記録

非人間要素への応答

運用判断

評価言説の扱い

② 子ども相互作用分析

・療育記録

役割生成

試行錯誤

再挑戦

相互調整行動

⑤ 結果１｜評価なき空間の【生成】構造

「ままならなさ」が評価を消し、自律を誘発

- 凍結した水道
- 泥にハマる一輪車
- 指示を聞かない馬

環境は思い通りにならない。

大人の「正解」や
「万能感」は通用しない。

- 権威を自ら縮小
- 失敗の開示
- 情動トーンの調整
  ＝「自己一致」の身体化

**非人間による
調整圧**

▼

**大人の
コントロール解除**

▼

空白の発生

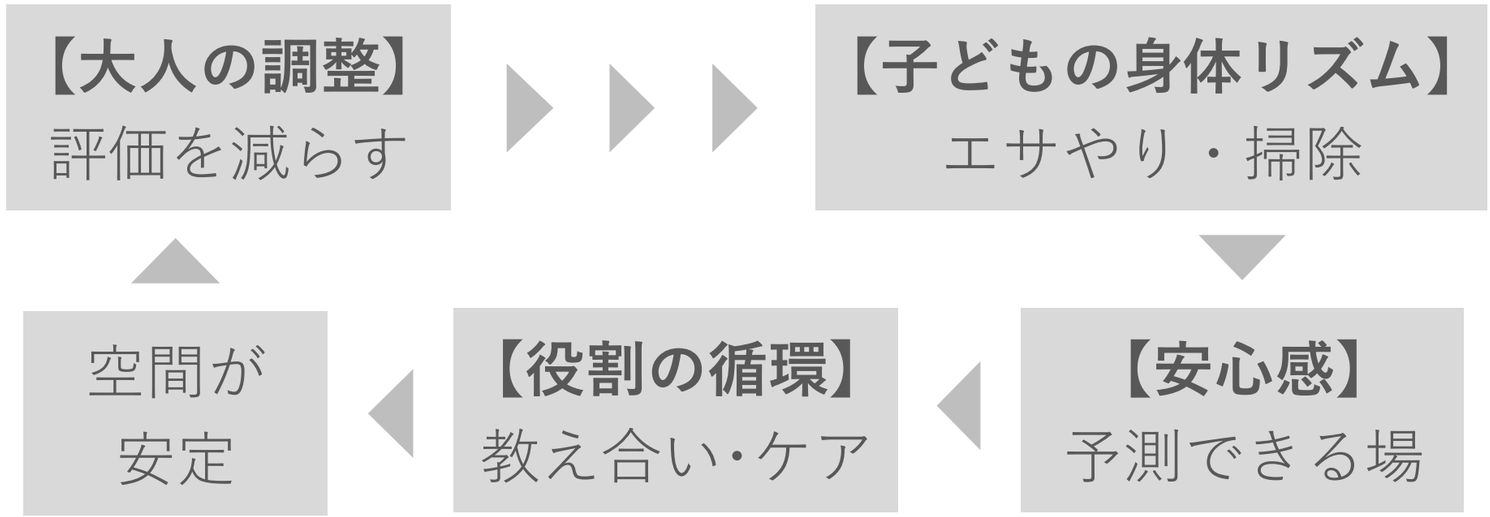
▼

**子どもの役割
生成**

- 自発的な役割取得
- 試行錯誤の加速
- 再挑戦の持続

失敗が叱責されない環境が、
自律を誘発する。

⑥ 結果２｜評価なき空間の【維持】構造



大人の調整

評価を持ち込まない仕組み

外から来る圧	空間での対応
成績・診断	一人の人として見る （スタッフの対話でほぐす）
達成目標	意欲を守る （できる／できない軸を外す）
事務負荷	ITで軽減（現場に集中）

子どもの循環

指示なしでも場が保たれる

- 身体のくり返しが秩序をつくる
- 教え合いが有能感を生む
- ケアが安全感を広げる
- 空間に“必要とされる場面”が常にある。

⑦ 結果３｜生成と維持のつながり：統合モデル

非人間要素（馬・自然・物理的不全）

▼（予定外の影響）

大人の自己調整・権威の解除

▼（評価の保留）

評価なき空間の立ち上り

▲（見直しの継続・困りごと共有）

▲

運用原理の再確認

▲（身体的ルーチン・役割循環）

▲

子ども同士の調整

生成層

- 馬や自然が予定を崩す
- 大人が答えを出さない
- 子どもが自分で動く

→「空白」が生まれる

予防は「人」ではなく「場のしくみ」で起きる

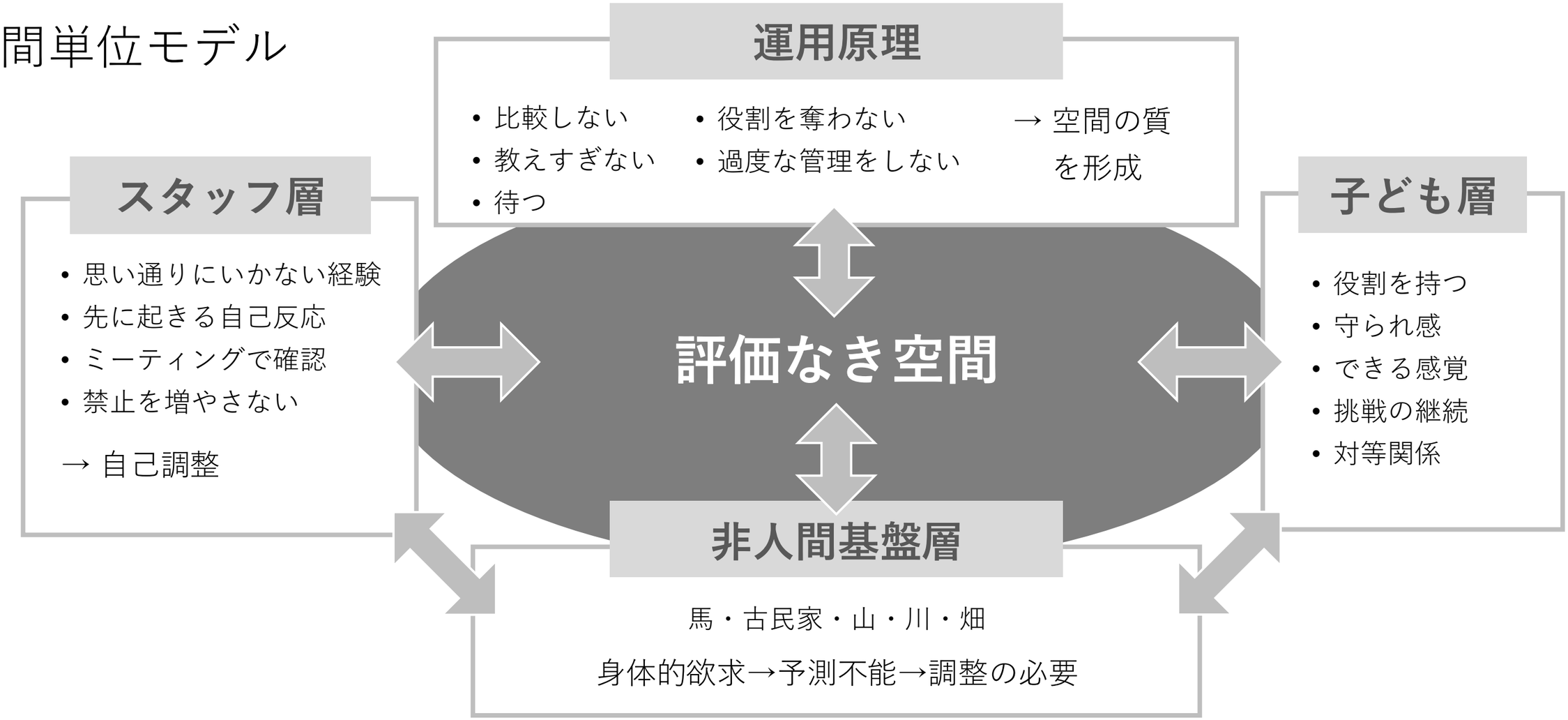
維持層

- 水やり・掃除が毎日ある
- 教え合いが自然に起きる
- ミーティングで考えを確認

→評価が戻らない

⑧ 考察１｜予防は「人」ではなく「場」で考える

空間単位モデル



予防の見方を変える

- 個人を変える → 場を整える
- 効果を見る → 関係の循環を見る

このモデルは

- 直線的な原因→結果ではない
- 相互に影響し合う循環型

⑨ 考察２｜予防実践への示唆

予防は「技法」ではなく「場の設計」 ― 空間設計として考える

予防は「何をするか」ではなく**どんな条件を保つか**で決まる。

原則①

調整が生まれる環境をつくる

- 予定外を消さない
- 不確実さを残す
- 身体を使う状況を含める

例）
馬や地形を管理対象にしない

原則②

空間の考え方を言葉にする

- 比べない
- 教えすぎない
- 禁止を増やさない

例）
ミーティングでくり返し確認

原則③

定期的に見直す

- うまくいかなかった場面を共有
- 評価が入り込んでいないか確認
- 原則に立ち戻る

例）
思い通りにいかなかった場面を検討

実践転用の要点

- 不確実さを残す
- すぐに評価しない
- 原理を共有する
- 定期的に確認する
- 個人ではなく場を見る

⑩ 結論と今後の展望

本研究が示したこと

「予防＝場の条件を保つこと」

1. 予防は「人」ではなく「場」で考える
2. 評価をしない空間は、意図して整えなければ続かない
3. 予防は単発の行為ではなく、くり返される循環である

この3条件は、
あなたの現場で
どう置き換えらますか？

応用可能性

「他の現場へ」

- 学校
- 放課後支援
- 地域の居場所
- 福祉施設

→ 場の条件として翻訳できるかを検討する

測定の方向

「効果より構造を見る」

- 場の質をどう測るか
- ミーティングの頻度と内容
- 調整行動の観察
- 役割の循環が起きているか

→ 行為ではなく条件を測る

共同研究

「次のステップ」

- 他実践との比較
- 馬や自然の有無による違い
- モデルの広がりを検証

補足情報・透明性開示

参考文献

一般社団法人ジェイス(2024). 「社会的マルトリートメント」概念の構築～「社会的親」の在り方の検討のために. 2023年度日本子ども家庭福祉学会民間団体活動推進調査研究事業報告書

AIの使用について

〇 使用範囲

記録データの整理補助（要約・カテゴリー抽出補助）、構造図の言語化整理、ポスター原稿の推敲支援、表現の論理整序、作図

生成AIは補助的ツールとして使用し、
最終判断および分析責任は発表者に帰属

倫理的配慮

個人特定情報の匿名化、保護者同意の取得、研究目的の明示、記録利用の説明

一般社団法人 三陸駒舎 http://kamakoma.org

岩手県釜石市にて、築100年を越える古民家を拠点に、馬 3 頭と暮らしながら、市内外から毎月延200名の子どもにホースセラピーを提供する。

- 馬を中心とした暮らし型の実践
- 放課後等デイサービス、児童発達支援
- 自然環境を活用した体験活動
- 地域文化の再接続

発表者　黍原 豊　きびはら ゆたか

岩手大学農学部卒業後、森と風のがっこう（葛巻町）、岩手県立児童館いわて子どもの森にて、環境教育・子どもの居場所づくり等に携わる。2013年から釜石市にて、釜援隊として復興まちづくりに携わる中で、地域固有の文化の再生と継続的な子ども支援の必要性を実感し、2015年4月に三陸駒舎を設立。
野外で人づくりに取り組む全国のリーダーを表彰する「ジャパン アウトドア リーダーズ アワード2024」で大賞を受賞。